広報

おおず

2022
4
No.207

（特集）デジタル化で何が変わるんですか

～ＤＸとＧＩＧＡスクール構想の推進～

今回の特集は、市政広報番組（市公式YouTubeチャンネル）で紹介しています⇒

（特集）デジタル化で何が変わるんですか
～ＤＸ（デジタル・トランスフォーメーション）の推進～

新型コロナウイルス感染症が私たちの生活や経済活動に影響を与える中で、新しい生活様式を実現していくために「デジタル化」による取組が進んでいます。デジタル庁ができ「ＤＸ（ディーエックス）」という言葉が飛び交い、市役所内でもオンライン会議やリモートでの打ち合わせなどが日常となりました。

学校では、タブレット端末を活用した学習活動が進んでいます。一方で「デジタルは難しくて分からない。私は、アナログがいい」との声もあります。

今回の特集は、「デジタル化」や「ＤＸ」で、私たちの生活がどのように変わっていこうとしているのかを考えてみました。

関係機関との緊急対応タイムライン連絡会

デジタル防災行政無線による放送

防災放送アプリ「コスモキャスト」

マイナンバーカードの健康保険証利用

全国各地に住むみなさんとオンライン会議

キャッシュレス決済

オンライン商談会

「大洲ええモン」オンラインツアー

アナログからデジタルに変わってきたもの

現在の広報誌に掲載している写真は、すべてデジタルカメラで撮影したものです。つい20年前までは24枚・36枚撮ればフィルムを交換、現像するまで写真の出来栄えが分かりませんでした。今はモニター画面ですぐに確認でき、1000枚以上連続で撮影してもＳＤカードなどに記録できるようになりました。さらにスマートフォンで撮った画像をＳＮＳで簡単に家族や友達に送れるようになり、写真や動画が特別な存在から身近なものになっています。

そもそも「デジタル」って

広辞苑（岩波書店）には、「ある量またはデータを有限桁の数字列（例えば二進数）として表現すること」と書いてあります。二進数は、すべての数を「０と１」の組み合わせで表すものです。つまり、コンピュータで文字や命令などを「０と１」の数字を使って処理することを「デジタル」というようです。専門的で、難しい言葉なので**「人が行っていることを代行してくれるコンピュータ」**と言い換えると分かりやすいかもしれません。身の回りにあるテレビ、電子レンジ、全自動洗濯機、ロボット掃除機など家電製品にもデジタル技術が使われることで生活がより便利になっています。

この30年で急速に進んできたデジタル技術

大洲市役所で電算システムが本格稼働したのは、平成元年９月１日。当時の広報には「電算室に中央処理装置、磁気ディスク装置などが備えられ、庁内各課に18台の端末機が配置」という記事があります。

この約30年で、手書き文書からワープロ、課に１台の端末が１人１台のパソコンに替わり、インターネットやメールが当たり前の道具になりました。現在の電算室には、光を点滅させながら稼働するサーバが並んでいます。

今後、インターネット経由で離れた場所にデータを保管する「クラウド」の利用が進むとこの風景も変わってきます。

事務電算化スタート（写真：平成元年10月広報おおず）

当時の電算室（写真：平成４年市勢要覧）

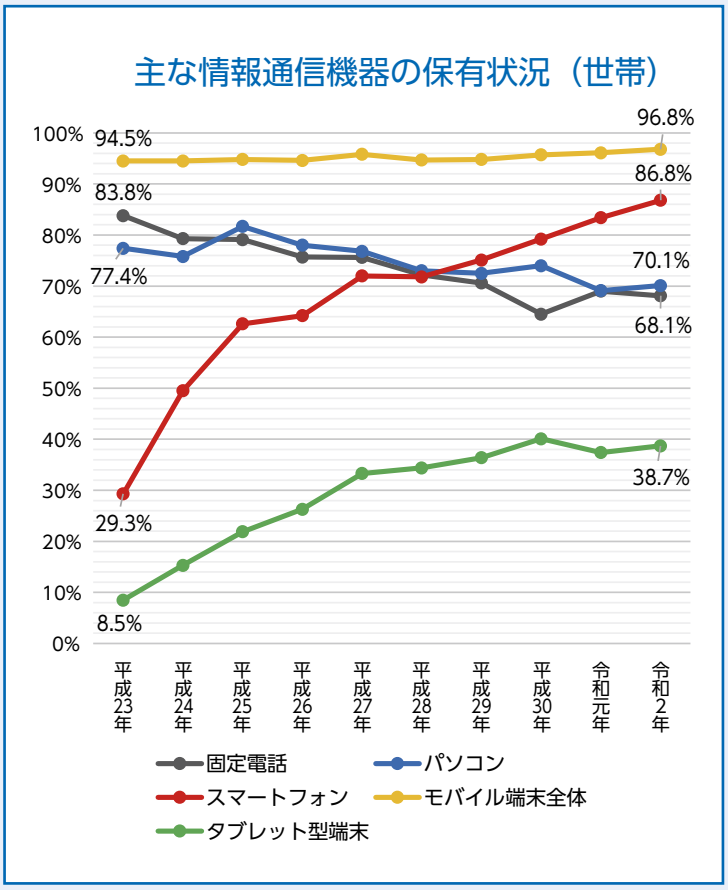
現在の電算室

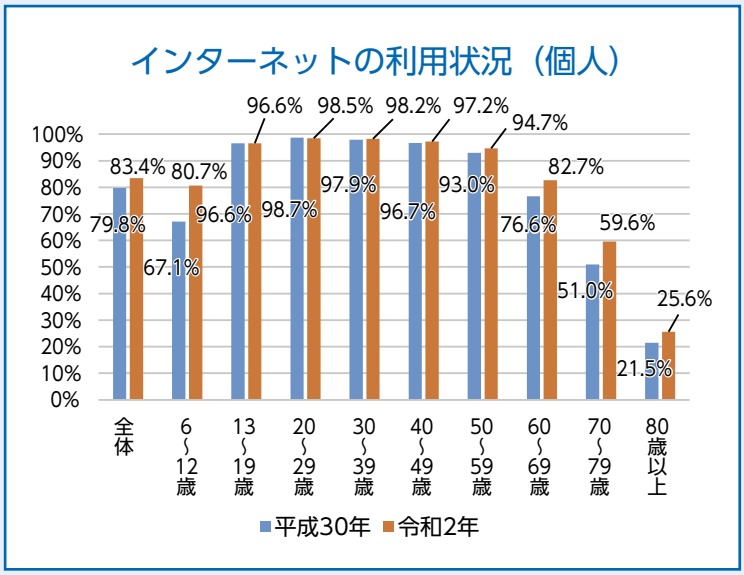
情報通信機器の普及が進んでいます

令和２年通信利用動向調査（総務省）によると、スマートフォンを保有している世帯の割合は、10年前（平成23年）の29.3％から令和２年には86.8％に伸びていて、パソコンや固定電話を保有している世帯の割合（約70％）を上回っています。携帯電話やスマートフォンなどモバイル端末全体では、96.8％の世帯が保有している状況です。

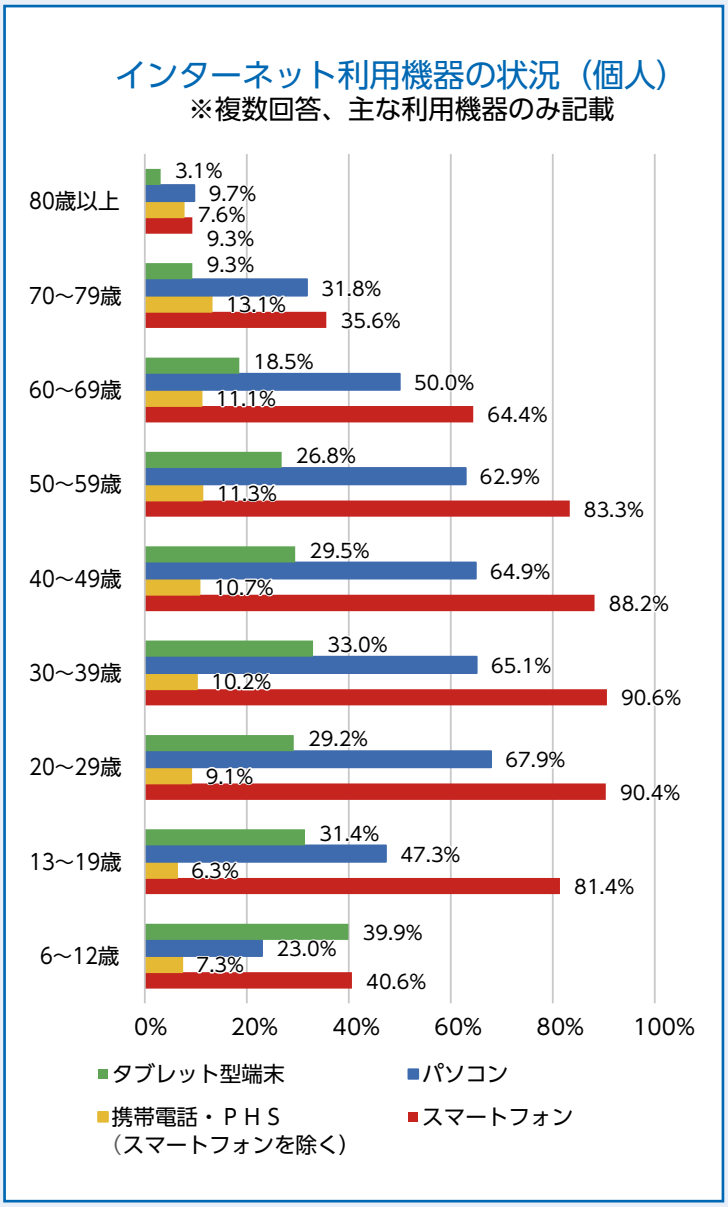
また、インターネットの利用者は、13～59歳の各年齢層で９割を超え、60～69歳で８割、70～79歳でも約６割の人が利用しています。近年は、高齢者のみなさんも多くの人がインターネットを利用していることがわかります。

さらにインターネット利用機器の状況では、スマートフォンがパソコンを上回り、20～39歳の各年齢層で９割以上、40～59歳で８割以上、60～69歳で６割以上がインターネットを利用する際にスマートフォンを利用し、スマートフォンの普及が進んでいる状況がわかります。





【25年前から現在までの携帯端末】
アンテナ付きで電話機能のみだった端末に、写真やメール機能が追加。今では、さまざまなアプリが使えるスマートフォンに進化し、時計型の端末と併用できる機種もあります。



図表：令和２年通信利用動向調査（総務省）

「ＤＸ」はデジタル“も”使った変革です

ＤＸは、英語の「Digital Transformation（デジタル・トランスフォーメーション）」を省略した言葉で、日本語では「デジタル・変革」と訳されます。頭文字の「ＤＴ」でなく「ＤＸ」となっているのは、「Trans」に交差するという意味があり、交差を1文字で表す「Ｘ」が用いられているからです。

デジタルは、自動で計算をしてくれたり、絵文字や写真、動画などを送信できたり、時にはロボット掃除機となって部屋を掃除してくれるなど常時稼働して人の代わりに働いてくれます。最近は、その技術を使って文字でコミュニケーションができる「チャットツール」や遠く離れた相手と会議ができる「オンライン会議システム」などが簡単に利用できるようになりました。

このような便利なデジタルの道具も活用して、行政サービスや市民生活、産業活動に変革を起こしていくことを「デジタル・トランスフォーメーション」と言います。一方で、デジタル技術は、扱い方を誤るとかえって情報格差を深め、利用者に不利益をもたらす恐れもあります。大切なのは私たちの生活を便利にする道具としてデジタル“も”使って変革を行うことで、変革したことで生まれる新しい価値やサービスを重視する取組が本来のＤＸです。

中央公民館で開催しているスマホ道場

デジタル“も”使って「幸せ・安心・誇りあるふるさと大洲」を目指します

デジタル化推進担当
大洲市参与　栗田　浩治（こうじ）

大洲市では、令和３年度に市内ほぼ全域における光情報通信基盤の整備や防災行政無線のデジタル化が完了します。また、マイナンバーカードの交付率が６割を超えるなど、デジタル化推進の基盤となるインフラの整備を着実に進めています。

近年、新型コロナウイルスの感染拡大で、地域・組織間で横断的にデータが十分に活用できないなど、さまざまな課題が明らかになったことを受けて、デジタル化の遅れに迅速に対応するとともに、「新たな日常」の原動力として、そもそもの制度や組織のあり方も変革していく、社会全体のＤＸ（デジタル・トランスフォーメーション）が求められています。市でも令和３年度からＤＸで目指す大洲の姿を検討し、「大洲市ＤＸ推進計画」策定に取り組んできました。

この計画では、デジタルがもたらしてくれる利便性を市民や事業者のみなさんと一緒に享受できるようになって、誰もが自分らしく生きられる、市民がみんな輝く社会を実現するために目指すべき姿や、デジタル化施策の基本方針を取りまとめています。

ＤＸの推進においては、インターネットやスマートフォンなどを利用できる人とそうでない人との情報格差（いわゆるデジタル・ディバイド）をなくしていくことが大切になります。誰もがデジタル技術に親しみ、その恩恵を受けられるように、公民館などで民間事業者と連携したスマホ教室などの取組も進めています。

デジタル技術“も”活用して、地域の強みやヒト・モノなどをつなぎ、未来を切り拓く新たな価値を創造するため、行政の効率化や市民生活の質の向上、地域経済の活性化など、誰ひとり取り残さないＤＸの推進に取り組んでまいります。市民・事業者のみなさんのご協力をお願いします。

【問い合わせ先】
企画情報課デジタル化推進係
☎0893(24)1738　　市ホームページ⇒

デジタルを活用した学習活動
～ＧＩＧＡスクール構想の推進～

令和２年度末に市内すべての小・中学校の児童生徒に１人１台のタブレット端末を整備し、現在、各学校ではタブレット端末を活用した学習活動を実践しています。

タブレットを使って意見交換

体育で技の順序を相談

英語で紹介する動画を撮影

総合的な学習の時間にグループ学習

タブレットを使った学力診断調査

大型モニターで考え方を共有

スピーチを撮影して自分で確認

課題の考え方を分類して班で共有

タブレット端末やデジタル教科書を使って次のような学習活動を行っています

▷インターネットを利用したさまざまな情報検索
▷ドリル教材を使った学習内容の習熟
▷考えをタブレットに書き込み友達に伝えて確認、書き込んだ内容を教室のテレビに大きく映して発表
▷カメラ機能で植物の成長や見学先の様子を記録、体育でフォームを確認、国語のスピーチを撮影して見直す客観的な振り返り
▷新型コロナウイルスの感染予防としてオンラインで集会などの様子を教室で視聴
▷デジタル教科書の活用

教科書がデジタル化されたもので、内容は紙の教科書と同じです。教科書や資料を大きく提示したり、動画を再生したりすることで、分かりやすい説明ができ、子供たちの意識を集中させる効果もあります。また、デジタル教科書は画面に書き込むこともでき、さらに英語では「読み上げ機能」があり、発音を真似(まね)しながら練習することができます。

※GIGA(ギガ)スクール構想の「GIGA」は、「Global and Innovation Gateway for All」の略で、「すべての児童生徒にグローバルで革新的な扉を」という意味が込められています。

大型モニターに映して発表

デジタル教科書の活用

タブレット端末を創造的な学びの道具として活用していくために

大洲市教育委員会
教育総務課課長補佐
(指導主事)　菊池　智(さとし)

市内の小・中学校では、令和３年度から本格的に授業などでタブレット端末の活用を進めています。昨年、小学校５・６年生660人と中学生966人へタブレットの活用についてアンケート調査を実施した結果、小学生は９割以上、中学生も８割近くが「楽しい」と答えています。

そして「授業でもっと使いたい」と答えた小学生は８割以上、中学生も約７割となり、子供たちがタブレットの活用を望んでいる状況もあります。しかし、単なるタブレットへの興味・関心から、タブレットを活用した学びへの興味・関心、学びの充実につなげていく必要があり、教員もタブレットが創造的な学びの道具となるよう研鑽(けんさん)に励んでいます。今後は、学習用タブレットが教科書やノートのような当たり前の文房具として子供たちの手元にある道具になってきます。

現在、小学校高学年と中学校においては、長期休業などにタブレット端末の持ち帰りを行い、学級閉鎖で登校できない場合への対応も計画してきました。持ち帰りを行うことで学校の授業と家庭学習をつなぐことができ、学習効果の高まりが期待できます。

また、令和４年度からは、平常時より小学校３年生以上で児童生徒の習熟に応じて順次、家庭学習に活用するようにしますが、家庭学習での活用にはWi-Fi環境が必要になります。

市内全域で光ブロードバンド環境が整備され、事業者による光インターネットサービスが提供されるようになったこの機会に、ぜひ家庭のWi-Fi環境整備をご検討いただくようお願いします。

なお、モバイルルーターを利用してWi-Fi環境を検討される方には、機器の無償貸出しを行います。通信料は家庭負担となりますが中学校卒業まで借りることができますのでご相談ください。

タブレット端末を上手に活用して、これからの時代に必要な力を育んでいくために、保護者のみなさんのご協力をお願いします。

【問い合わせ先】
大洲市教育委員会　教育総務課　☎0893(24)1733